



2016年08月31日

## 子どもの豊かな心を育む／農山漁村で宿泊体験学習／自然や人との交流を体感 ／全公立小学校での実施めざす／公明が推進 地域の家庭で過ごす民泊も増加 ／広島県

2016年08月31日 3面

子どもの豊かな心を育むため、農山漁村での宿泊体験学習が各地で広がっている。広島県では、教育効果が高いとされる3泊4日の集団宿泊活動について、全公立小学校での事業実施をめざしている。同県の取り組みを追うとともに、千葉大学大学院の木下勇教授に話を聞いた。

「もう少しで切り倒せるよ。がんばって!」。広島県北広島町の山林で、額に汗して間伐作業に取り組むのは、同県の呉市立昭和南小学校の児童たち。指導員の指示を受け、のこぎりを持つ手に力を込める。ミシミシと大きな音を立てながら、スギの木が勢いよく地面に倒れると、児童たちから大きな歓声が上がった。

児童らはその後、切り倒した間伐材でコースターを作製。男子児童は「親にプレゼントする」と誇らしげな表情を見せていた。近くで見守っていた同小学校の江口修三校長は、「学校では見られない、生き生きとした表情が見られた」と話していた。

同小学校が取り組むのは、県が2013年度から始めた「山・海・島」体験活動推進事業。対象となる小学5年生の児童は、乳搾りや農作物の収穫、登山、海辺の生き物観察などの自然体験、地域住民との交流に取り組む。

事業を開始した当初は、県内102校での実施だったが、今年度は371校にまで拡大し、全公立小学校の約80%に上る。その後押しとなっているのが、県が創設した補助制度だ。

集団宿泊活動にかかる経費は、修学旅行と同様に保護者の負担となる。その負担を少しでも軽減しようと、県は3泊目以降の諸経費を補助している。具体的には、児童1人当たり、施設で宿泊する場合は4000円、民家への宿泊の場合は1万円を補助する。地域の家庭に宿泊する民泊は、児童の成長に与える影響が大きいことから、「活用する小学校は徐々に増加し、今年度は約50校に上る」（県豊かな心育成課）という。

北広島町内の家庭で、民泊を体験した福山市立大津野小学校の児童は、「地域の方の優しさに触れて心が温かくなった。この経験を胸に、親、友達を大切にしていこう」と話す。民泊家庭として児童を受け入れた同町在住の平岡正典さん（75）は、「家に若い人がいないので、賑やかで楽しかった。子どもたちから元気をもらった」と述べ、児童たちとの別れを惜しんでいた。児童の中には、涙を流しながらバスに乗り込む姿も見られた。

\*

同事業に関して、公明党広島県議団（栗原俊二団長）は議会質問や予算要望などで積極的に推進してきた。児童の林業体験などを視察した尾熊良一県議は、「今後は受け入れ側の支援などにも取り組み、県内全校での実施が実現できるよう全力を挙げていく」と語っていた。

\*

小学生の農山漁村での宿泊体験学習は、国も力を入れており、総務省、文部科学省、農林水産省が連携して、08年度から「子ども農山漁村交流プロジェクト」を実施している。子どもたちの学ぶ意欲や自立心、思いやりの心などを育み、力強い成長を支える教育活動として、体験学習の導入を促している。

各地で受け入れ体制づくりが進み、14年度には全国162のモデル地域が整備されている。宿泊体験に参加した小学生は13年度までで約50万人に上る。

『受け入れ体制の整備が重要／千葉大学大学院／木下勇教授』

農山漁村での体験学習は、自ら考え、行動し、チャレンジする機会が多くあり、主体性や自信、自尊心が培われる。また、集団活動の中で、人との付き合い方や道德観、正義感、倫理観といったものも養われる。

より高い教育効果を得られる長期滞在は、受け入れ体制の整備が重要となる。各地で民泊が活用されているが、民泊家庭の負担感が増しては長続きしない。各家庭が、かしこまらずに普段通りの生活を提供できる体制づくりが大事である。

その上で、体験学習の内容をマネジメントする役割が必要である。行政が適した人材を雇用するか、NPOなどの団体に委託するか、または地域と協働の施策として展開するか、必要な部分を補完して支えていくことが重要といえる。